

# 「屈することなき絶望」

——現実はあまりにも厳しい。悲しみ、悔しさ、恐怖のなか、互いをいつそう愛おしみ、魂を取り戻し、果てしなく欲深い権力に抗していきたい——

スタンディングロックと福島に学ぶ

フィールド ノーマ  
(アメリカ・シカゴ大学名誉教授)

## I. 絶望とは ジョン・バージャーと武藤類子

皆さんこんにちは。雨のなか、よくおこしくできました。

今回のタイトルですが、「絶望」という言葉に、というか、この言葉を発することに抵抗を感じる方がきつといらっしゃると思います。「若い人に希望が出る話をしてください」と頼まれることがあります。どんな相手であれ、またその目的がいかに尊くても、実感していない希望を語ることは容易にはできません。私自身、たまには立ち止まって、実際感じている絶望を見つめることに意味があると考えます。自分の感情を否定し続けることは大変な負担になることはみなさんも経験されていると思います。しかし、ここで話ししたいのは個人の内面の問題としての絶望に限られません。

「屈することなき絶望」という一見逆説的な言葉は、今年（2017年）の2月、96歳で亡くなったイギリスの小説家・美術評論家・エッセイストであるジョン・バージャーから取ったものです。パレスチナ占領地区の人たちの生き様を「恐怖、諦観、敗北感なき絶望」と2005年のエッセイに表現しているのです<sup>1)</sup>。このエッセイは2007年刊のコレクションに収められていて、刊行後、間もなく読んでいました。それが、昨年11月のトランプ勝利のあまりの衝撃にオロオロしていたとき、義理の息子が「今、あの本読むといいよ」と言ってくれて、書棚から引っ張り出してきました。心底必要とするときに出会った言葉には格別なものがあります。そういうことを川畑さんとメールのやり取りしてしました。絶望したから、これでおしまい、諦めてもいい、っていうことではな

い。こういうスタンスで生きていくってどういうことだろう、と。

バージャーが描く頑強な絶望とはどんな痛みに試されているのだろう。それは例えば、夜になると、イスラエルの入植者が丘から降りてきて、農民が一所懸命雨水を溜めたプラスチック容器に穴を開けていくこと。あの砂漠地帯で、同じ人間なのに、なぜこんなことができるのでしょうか。入植者の集落を建設するには何百本ものオリーブの木を伐採しなければならない。その作業に当たるのは失業中のパレスチナ人。オリーブは家族が前日収穫したもの。世代を超えての弾圧。そして、激しきは増すばかり。

「屈することなき絶望」とは、今回の企画の主催者である川畑博昭さんが整えてくださった訳で、この講演のタイトルも、彼が半ば一方的に決めたものです。ありがたい共犯関係と思っています。

「絶望」を語る時、私にはもう一つ拠り所があります。福島第一原子力発電所で起きた「核災害」(詩人・若松丈太郎さん(故人)の提唱する呼称)関連で、刑事裁判は一件しかありません。それは武藤類子さん率いる告訴団の尽力で実現したものです。現在は福島原発刑事訴訟支援団となっています。この武藤さんはときたま、しかし繰り返し、「絶望」に触れています。例えば、2016年、UCLAの歴史家・平野克也さんのインタビュー記事で、「絶望も絶望としてきちんと絶望したい」と語っています<sup>2)</sup>。いつも落ち着いた、間違いなく暖かさが伝わってくる物言いの武藤さんが根強く絶望に拘るのは意外かもしれません。平野さんは「絶望は絶望として冷静に受け止めたい。で、そうでなければ……希望も見いだしていけない、ということなんですか」と尋ねると、「確かに人は希望がなければ生きられませんよね。でも、この絶望的な情景を私たちは認識する必要があります」と武藤さんは応える。絶望を希望への架け橋として捉えるのではなく、ひとまず、絶望それ自体を意味ある、価値あるものとして捉える。目前の現実に関心を開き、それが示す真実を知ろうとする。絶望は現実に見合った心の働きではないでしょうか。後ほど、また福島の話に戻りますが、今、どんな絶望の種があるか、少しでも触れておきましょう。例えば、避難者の切り捨て。放射性廃棄物の蓄積。原発に関しての安全神話は崩れたものの、次の安全神話は被曝をターゲットとしていることが見て取れる。健

康被害は一切否定される。どこそこから耳に入ってくる突然死。原発との関連は認められることはないだろう、という前提もあれば、認めたくない、という気持ちも強い。そんな息苦しいなか、「絶望的な情景」を心で受け止めたとき、ホッとする瞬間もあるのでは、と思えてきます。真実に触れたとき、身体全体に伝わるではないですか。そして、発見の興奮もあれば、「覚悟」という厳しい心情も生まれてくるかもしれません。どちらも一つの原動力になり得るものです。武藤さんの「きちん」と「絶望」するとは「絶望」の重たさに生活レベルの、片付けごとを思わせる「きちんと」が加わる、絶妙な組み合わせです。そこから、なにか動き出しそうではないですか。

### トランプ政権スタート

トランプ政権発足からそろそろ2ヶ月になります。合衆国に暮らす人全ての日常に多かれ少なかれ、変化が生じています。トランプが掲げた反移民政策は国内の「不法滞在者」と称される人びとを恐怖のどん底に落とし込めています。この人たちのなかには海外、とくにメキシコで生まれ、幼少期に親に連れられ入国した人もかなりの数に及び、彼らにとっては、英語が実質的な母語で、アメリカが「ホーム」です。いずれにせよ、「不法滞在者」の労働がアメリカを動かしている、というのが現状です。宗教や教育界はこの人たちを守ろうと、すばやく対策を練りはじめました。空港で期せずして入国を拒まれる人たち——アラブ諸国関係が目立ちますが——も大量に出て、通訳ボランティアとして駆けつける大学の同僚もいました。

すでに入国が決まっていた難民も深刻な危機にさらされています。中東でアメリカが繰り広げてきた戦争のおかげで、どれだけの人が住み慣れた土地から追われたか、想像に難くないでしょう。私の家族、とほとても限られた話ですが、だれもが打ちのめされているなか、具体的な行動に立ち上がったのはあのバージャー再読を勧めてくれた義理の息子です。大きな難民支援団体にボランティアとして登録し、地域の小さな支部に加わり、かろうじて入国できた一家の支援に当たりました。住居や最低限の家財道具の確保、子どもの学校の手続き、病院のアポ取りや送迎、安価で治療を提供してくれる歯科探し等、生活全

体に関わる支援を必要としています。思えば当然のことでしょう。言葉の不自由もありますし。私たちはこぼれ話をとおして、この時期、この国で難民として新しい生活をスタートすることはどういうことか、垣間見させてもらっています。

私の現状との関わりはもっともっとささやかなものです。トランプ政権発足後、雨後の筍ではないですが、全国や州規模やさらに地元規模で、さまざまな組織が立ち上がり、携帯のアプリで、「今週の課題五つ」や「今日の電話かけ」の指示が届くようになりました。はがき用の切手も大量に買い込みました。私は主に電話かけを選びました。ほとんど生まれて初めてのことです。正直言うと、いままで政治家、とくに連邦議会レベルの政治家に直接アピールする意味を感じてこなかったのです。でも、いまはそんなことは言っていられない、と周りも自分も必死です。なにしろ毎日とんでもない政策がこれまたツイッターで発表されるのですから。公教育や環境にとって破滅的な人事。もともと満足とはいえない公教育であれ、年月を掛けて積み重ねられた環境行政であれ、一夜にして崩れ去ることが予想でき、多くの人が突き動かされています。そこで、該当する委員会のメンバー議員への電話かけに踏み切ったのです。共和党の委員にも。アメリカではほとんどファックスは使われません。メールのほうが自分にとっても楽ですが、この間はじめてつながったグループのベテラン活動家によると、政治家は有権者からの電話がなにより、と教えられ、この際、生身の人間に訴えてみたい、と思っただけのことです。多くの有権者が同じ思いで見えて、ワシントンの電話番号はなかなかつながりません。留守電を残すこともあります。地元イリノイ州選出議員の場合はシカゴの事務所に掛けてみます。ことがらによっては、スタッフがあまり予備知識がなさそうなので、意見だけでなく説明を加えます。実際電話かけがどこまで有効か、わかりません。ただ、若いスタッフの疲れ切った声が話を続けるなか、張りが出てくるのが伝わってくると、それだけでもよかった、とこちらも元気がでます。

それから、デモ活動です。まずは1月21日、トランプ就任の翌日、世界各地で開催された「女性のマーチ」(Women's March)。トランプが隠そうともしない女性蔑視が最大の原動力だったかもしれませんが、様々な人権の主張と共

に、なんといってもトランプの横暴を許さない、という決意が参加者から湧き上がっていました。ワシントンでは47万、シカゴは予想を何倍も上回る25万、世界では700万の参加者、と報じられています。シカゴの1月と思えない暖かなデモ日和で、女性、男性、子どもが街中目指して、後から後から集まってきました。我が家は8歳と6歳の孫も初のデモ参加となりましたが、あまりの人数で演説を聴くどころか、デモ行進中止のアナウンスも届かない状況でした。プラカードはイラストにもメッセージにも苦心の跡がうかがえ、アラビア語やスペイン語のものも数々ありました。断固としてファシズム反対を訴えるもの。殺害されたマイノリティ女性の肖像をトップに深刻な女性に対する暴力を訴えるもの。見上げればプラカードが波打ち、下を向けば足の林立。ほとんど動きが取れないベビーカー。南アジア系でしょうか、可愛い姉妹の写真を写してもいいですか、と尋ねると、「どうぞ」と誇らしげな返事が返ってきました。いつまで幼い子どもを安心してこうした抗議集会に連れて行けるのだろう、と心のどこかでは思っていました。

行進中止の指示は聞こえていないので、街中を歩き続ける。高架線列車が頭上を通るたびに、プラカードを振りかざしながら、歓声が上がると、車掌も客も手を振って応える。シカゴ市全体が「我々の大統領ではない！」（“Not my president!”）と叫んでいるように見えました。

### 水の守り人 スタンディングロックの闘い

この間、いろいろなデモに参加しましたが、女性のマーチ以外、もう一つ記憶に残るものがあります。それは土曜の昼下がりに、凍てつく寒さのなか、30人ほどがトランプタワー（ホテル）の前に集合し、「水は命」を訴えたアクションです。背景は前年（2016年）の夏から全国のみならず、世界の注目を浴びるようになったスタンディングロックの「水の守り人」の闘いです。問題は北ダコタ州からシカゴがその最大都市であるイリノイ州まで、1800キロ以上にも及ぶ原油パイプラインの建設です。当初は北ダコタ州の州都ビズマークを通るはずだったものを迂回して、先住民スー族の居留地を通らせることになってしまったのです。それは彼らの飲み水を汚染する可能性と、聖地や墓地

を無造作に破壊することを意味しています。

抗議活動は春ごろから、SNS に長けた部族の12, 13歳の若者を中心に、部族の危機的状況を外部に発信し始めたのです。8月半ばには、100年ぶりに、合衆国やカナダの植民地政策によって離ればなれになっていた、いわば親戚関係の7部族の代表がスタンディングロックに集まり、「七つ火の会議」(Council of Seven Fires) が始まります。聖なる火が燃え続き、その場は寝泊まりするキャンプ場ようになっていきます。どうすれば命の源である水を守れるのか。活動は「抗議」(protest)ではなく、あくまでも水を守る(protect)ことで、自分たちはwater protectors、「水の守り人」(川畑さん提案の訳)であると主張します。この運動の噂が広がり、やがて全国から、アメリカ大陸全体から、そして世界から、数々の先住民の人びとが集まってきました。さらにパレスチナ人、Black Lives Matter (取りあえず、「黒人の命は大切」<sup>3)</sup>)の人たちも加わります。先住民と水。虐げられた人びと、生き物全てが必要とする水。命と尊厳。地球の引力そのものに引かれるかのように、この人里離れたところに人が集まってきたのです。交通手段を確保するにもかなりの苦労を重ねて。馬に乗っても来ました。西部劇では必ずインディアンに敵対するカウボーイの集団までやってきました。キャンプにティーピー(先住民の野営移動式住居)やテントを張り、冬に向けて馬の小屋まで建てられました。スー族はパイプライン建設を許可した米国陸軍工兵隊を訴えてもいますが、目に見える抵抗は歌、踊り、祈りです。まさに身体を張って建設を阻止し、土地と水を守ろうとしたのです。

そういう人たちに対して、どういう対応がなされたか。100パーセント企業側に立つ当局は「七つ火の会議」のキャンプ場の立ち退きを実施するにはどんな手段も辞さない、という構えが当初からはっきりしていました。飲料水を運ぶ給水車は早い時期に妨害する。伝統的な催涙弾やゴム弾(ゴムは外側の話で、実は殺傷力がある武器であることをスタンディングロックを通じてはじめて知りました)はもちろんのこと、海外で恒久戦争を営むアメリカですから、ありとあらゆる武器が導入されます。戦車まで繰り出され、閃光弾や音響兵器は守り人たちの心身を痛めつける。四六時中低空飛行のドローンで睡眠を妨

害。-30°Cまで冷え込む深夜に放水砲から冷水を放水。民間警備会社はブルドーザーとともに犬まで出動させる始末で、人も馬も嘔まれてしまいました。

こういうことがオバマ政権の終末期に起きていたのです。当然、オバマに相当なプレッシャーがかかり、とうとう、12月4日、米国陸軍工兵隊はパイプライン建設にストップをかけ、住民の意見収集を含む環境アセスメントを行うと発表しました。

この発表がどれだけの喜びを引き起こしたか、みなさんも想像できることでしょう。とくに印象的な場面があります。さきほど、この運動を世界に知らせたのは若者、とお伝えしましたが、その一人、トカータ・アイアンアイズ（苗字の Iron Eyes を直訳すると「鉄眼」）の反応です。13歳になった彼女は、「惨事便乗型資本主義」という世界の理解に欠かせない概念を提起してくれたカナダ人物書きのナオミ・クラインに「今どう思っているの」とマイクを突きつけられて、「自分の未来を取り戻した気分」と即答して、わっと泣き出したのです。

女性のマーチの3日後の1月24日、この原油会社に投資しているトランプ大統領は陸軍工兵隊がアセスメントを迅速に行うよう命じ、2週間後の2月7日にはパイプライン建設続行を許可したため、パブリックコメントを含む環境アセスメントは取り消しになってしまいました。取り戻せた未来は正味2ヶ月、と言ってしまうにははばかりがあります。抵抗が諦められたわけではないです。例えば、草の根運動に息を吹き込んだ若者たちは、この原油会社（Dakota Access）に融資する銀行への預金停止の呼びかけを提案しています。日本ですとみずほ銀行、三菱 UFJ 銀行、そして住友三井銀行だそうです<sup>4)</sup>。

2016年の12月4日に戻りましょう。もう一つ、忘れてはならないことが起きています。建設中止の祝いを兼ねて、先住民と退役軍人のあいだで「赦しの儀式」(Forgiveness Ceremony) が開かれたのです。どういうことでしょうか。実は、それ以前から退役軍人がスタンディングロックに結集しはじめていました。先住民はかなり高い率で軍に志願していて、徴兵制度があったベトナム戦争以後、湾岸戦争、イラク戦争、アフガン戦争に参戦して、多大な身体的、精神的被害を被っています。もちろん、PTSDを患っています。つまり、深い傷を負った人たちもこの草の根運動に参加していたのです。イラク戦争の退役



軍人が「イラクのときは間違った側に立ってしまった。今度は連邦憲法に書いてあるように、民衆の権利を守る方に立つのだ」、と言っています。ウェスリー・クラークジュニアという、コソボ戦争当時ヨーロッパ NATO の最高指揮官を務めたウェスリー・クラークの一人息子が先住民を含めて、ひろく退役軍人にスタンディングロックへ結集することを呼びかけていました。彼が提案したのは、所属部隊の軍服を着て、武器は持たず、「水の守り人」と当局のあいだに身を置くことでした。結局、陸軍工兵隊の決断を受けて代わりに、「赦しの儀式」が行われることになったのです。会場は部族のカジノ。合衆国の多くの部族にとって、カジノは数少ない収益源で、また大人数が集える会場でもあるのです。その日は500人ほど集まり、退役軍人のリーダー格として、クラークジュニアは第七連隊の礼装に身を固め、車椅子に座る長老でヒーラー、活動家のレナード・クロードッグの前で帽子を脱ぎ、跪いたのです。第七連隊とは南北戦争後に編成された部隊で、当時、急速な西部開拓が進み、第七連隊は土地から追われる先住民を制するために起用されました。第二次大戦まで馬に乗っていたそうですが、それ以降は戦車です。クラークは赦しを請う言葉に部隊の歴史を盛り込んでいます。「私たちはこの土地に来て、あなたたちと闘いました。土地を奪いました。条約を結び、後に破りました。聖地から鉾物を盗みました。聖なる山を爆破し、我々の大統領の胸像を彫り込みました。あなた方の子どもを取りあげ、言葉を作り替えようとし、神があなた方に与えた言葉を撲滅しようとしてきました。あなたたちのことを尊敬せず、地を汚染しました。言い知れぬほどあなたたちを傷つけてきましたが、今日ここに来たのはお詫びを申し上げるためです。お役に立ちたいのです。そして赦しを乞うのです。」

これを受けて、クロードッグはクラークの頭に手を乗せ、「世界平和」を三度唱えています。そして、「土地は私たちが所有するものではなく、私たちが土地に属するのです」と言っています。このとき、先住民独特の叫びが会場から湧き上がります。その場で涙を流さなかった人は一人としていなかったはず。当然、先住民だけでなく、黒人もクラーク自身を含む白人退役軍人も多くは PTSD に悩まされてきたわけで、12月の北国の夕暮れ時に展開されたセレモニーの言葉、声色、仕草には合衆国の加害と被害の歴史が分かちがたく凝縮



されていたのです。是非いちど動画をご覧ください<sup>5)</sup>。

## II. 悩みの数々——福島、私たちの

### 海はいくらでも汚してよいものなのか

「水は命」とはいつ、どこに行っても真実の訴えです。スタンディングロックの運動を知る前に、福島で「命の海」を守ろうというデモに参加した経験があります。それは昨年（2016年）の6月22日のことです。福島原発事故の刑事責任を問い続け、刑事裁判の実現を可能にした武藤類子さん率いる福島原発告訴団は2013年9月に汚染水流出事件で福島県警に刑事告発をしました。熔け落ちた燃料に接触した地下水が海に排出されていること、応急措置として作られた脆弱なタンクから高濃度汚染水が環境に漏洩していることは「人の健康に係る公害犯罪の処罰に関する法律」違反である、という内容です。告発に当たってのプレスリリースには「私たちは、今回、検察ではなく福島県警に告訴しました。事故当時、いのちがけで人命救助や避難誘導の任にあたってくださった警察官のみなさんなら、私たちの訴えを真摯に受け止めていただけると信じてのことです」とあります。12月までには6000人以上もが告発人となりました。しかし、書類が福島地検に送られたのち、2016年3月29日に全員不起訴とされました。そこで告訴団は福島検察審査会に審査の申し立てをしました。（刑事裁判もこの検察審査会という制度を通して実現したのです。）

私が参加したデモは、「放射能でこれ以上海をよごすな！」という横断幕を先頭に、福島市の中心街を50人ほどで歩くものでした。水曜の午後。通常どうなのかはわかりませんが、街は驚くほど閑散としていました。中学生が数人バス停に立ちながら、こちらをチラッと見て見ぬ振り。一軒だけ、商店でしょうか、女性が私たちの方を見て手を振ってくれました。そのありがたさ、みなさんおわかりになりますか。

福島検察審査会の不起訴相当決議は翌日発表されました。

### 国内外の原子力機関と隣り合わせの幼年期放射線教育

もう一度、プレスリリースの言葉を振り返ってみましょう。「事故当時、い

のちがけで人命救助や避難誘導の任にあたってくださった警察官のみなさんなら、私たちの訴えを真摯に受け止めていただけると信じてのことです。」相手の人間性全体に呼びかけるところからして、武藤類子さんの文章に違いない気がします。いくらがっかりさせられても、彼女はこう呼びかけるのです。むなしく思っても、他に道はないのでは。

かつて原子力発電の安全神話を徹底させた国はその後どういう考えを示してきたか。大雑把にいうと、福島原発事故からの被曝は大したことなく、健康被害は証明されておらず、予想もされていない、という見解が基盤となっています。それに基づいた政策のほんの一部を昨年福島で垣間見ることができました。中通りに所在する三春町には、2016年にオープンした環境創造センターという実に立派な施設があります。「福島県の環境回復・創造」に向けた研究と一般向けの交流棟（コミュニティ）があり、見晴らしのきく、広大な敷地を占めています。研究の方は日本原子力機構（JAEA）や国立環境研究所、さらに国際原子力機関（IAEA）も関わっています。ここで見逃せないのがIAEAの存在でしょう。原子力の平和利用を促進するために設立された組織ですが、それだけではありません。みなさんはWHO、世界保健機関のことはご存じと思いますが、1959年にIAEAとの取り決めにより、放射線の健康影響については、WHOは実質的にIAEAに従属させられています。一方コミュニティですが、棟内には和室もあり、子ども連れのお母さんがくつろげるようになっていきます。いかにも予算をつぎ込んだ展示のなかに、私の目に留まったのは幼児向けの放射線教育コーナーでした。ガラス張りのケースのむこうにはアルファ、ベータ、ガンマ線を表すプレートのようなものが浮いていて、ゲーチョコキパーでそれぞれを防ぐことができる、という発想です。「ベータ線をチョコキでふせぎましょう！」という具合に。そばに優しいお姉さんが子どもたちと一緒に飛び跳ねながら、「お母さん、もっと頑張ってください」と保護者に声を掛けていました。ちなみに、福島の子どもが「本県の状況を適切に理解できる力」を身につけるよう、小・中学校等は来館の際、交通費補助制度が設けられています。

## あるのかないのか、語れない健康被害 被ばく医師・肥田舜太郎の提言

福島では健康被害は起きていないとされています。チェルノブイリの場合、正式見解で唯一因果関係が認められたのは小児甲状腺がんですが、それすら認められるのには年月を要しました。福島の県民健康調査は実質的に小児甲状腺がんには絞られています。通常は100万人に2人程度とされてきたがんですが、県民健康調査ではすでに194人ががん、あるいはその疑いが認められています。これは多発ではないか、と疑うのが自然に思えますが、県の専門家は頑なに原発事故との関係は「考えにくい」と主張してきました。それだけでなく、検査自体が県民に無用な不安を強いるものとして、あの手この手で検査の縮小を図っています。洋の東西を問わず、特に「低線量」被曝と健康被害をつなげることは非科学的、とするのが核の時代の通念ですが、調べないことをなぜ科学的と言えるのでしょうか。「わからない」から調べ続けよう、とあるべきではないでしょうか。

被曝と健康となりますと、つい最近100歳で亡くなった肥田舜太郎医師抜きには語れません。肥田先生は戦時中若い軍医で、広島原爆投下の翌日に広島市に戻っています。つまり、彼自身、入市被ばく者で、生涯をとおして被爆患者を6000人以上診てこられた医師です。原爆投下後の早い時期に彼は一つの謎に突き当たります。それは、なぜ「ピカ」を見ていなく、黒い雨にも当たっていない人たちがあきらかに被爆した患者さんと同じような症状を見せ、亡くなっていくのか、ということです。米軍なら情報があるだろう、と当たってみると、逮捕されるという目に合ってしまいます。しかも一回や二回ではなく。長い長い年月の末、問題は内部被曝、という結論に到達します。その軌跡は鎌仲ひとみ監督の名作、「ヒバクシャ 世界の終わりで」をご覧になればよくおわかりになると思います。このドキュメンタリーは私の知る限り、広島・長崎と長崎原爆のプルトニウムが製造された米ワシントン州ハンフォード、そして湾岸戦争の劣化ウランの健康被害を一つの作品で取りあげる唯一の試みです。みなさんはいかがでしょう。私自身、福島が起きるまでは外部被曝と内部被曝の違いをしっかりと把握していませんでした。放射線を送り出すものが体外にあるか、吸引や飲食で体内に取り込まれたかによって健康被害はかなり違いま

す。核技術の歴史は後者を隠蔽するか、それが無理な場合は矮小化することに国家、企業、科学者が躍起になってきたことを物語っています。その路線は今日に至るものです。

福島が起こったとき、肥田先生はすでに94歳でした。この事態をどう捉えていらしたか、再確認したく、少し調べてみると、2012年4月号の『マガジン9』というメルマガに簡潔かつ的を射たインタビュー記事がありました。彼ほど長いこと内部被曝の脅威を訴えてきた医師は世界を探してもいないでしょう。「これから何十年にわたっていろいろな病気がでてくるだろう」と切り出し、こう続けています。「政府は慌てずに対応できるよう、医療体制をちゃんと作っておかなくてはなりません。そして医者も患者をちゃんと診療できる力をつけておかないといけません。慢性被曝の症状を前にして、何だかわかりません、というのでは広島や長崎の時と同じことになってしまう。原爆の被爆者はどこの病院に行っても『病気じゃありません』と言われ、それで理由もわからないまま、多くの人が苦しみまた死んでいったのですから。」

しかし、さきほど申し上げたように、福島県は甲状腺検査すら縮小しようとしています。肥田先生は毎年「世界唯一の被爆国」を高らかに訴える日本で被曝の影響で生じた疾病の診断や治療の研究がなぜ進んでいないのか、その背景をも説明しています。7年間に及んだ占領期は放射能関連の調査も研究も国家機密で、講和条約後の日本はアメリカの「核の傘」に守られている、ということで、日本政府が核政策を進めるに当たって不都合なことは隠蔽してきたため、「今の日本の医者には被曝症状がどういうものかは、全然わからない」という事態です。実際、わかっている医師や研究者もいると思いますが、それを患者に伝えることを是としないか、組織的に阻まれているのではないかと私は思っています。職を賭けてまで行動できる医者はそれほどいないのでは。でも、被曝と因果関係の可能性を語らずとも——語らないからこそ——患者の力になり続ける医者もいることでしょう。

肥田先生のインタビューからは厳しい現実から目をそらさず、精一杯、人びとの、とくに子どもの安全を確保しようとする意志が伝わってきます。例えば、「個人の手では避難したくてもできる人とできない人が出てきますからね。

みんなができないことは、私は言いたくはないのです。」これは彼の社会的価値観の根幹からくる思いでしょう。しかしながら、被曝にとくに敏感な子どもはどうにかしたい。そこで、政府、政党、委員会に小中学生の集団疎開を強く呼びかけました。これは国家にしかできないこと、と確信して。しかし、国は動きませんでした。

「みんなができない」こととしての避難について、一言付け加えると、略称「子ども被災者支援法」はこのインタビューの数ヶ月後、2012年6月27日に公布されています。原発事故の被害を包括的に捉えて真摯に支援しようとする、驚くほど優れた法律です。例えば、「被災者自らの意思による居住、移動、帰還の選択の支援」。いわゆるチェルノブイリ法に学んだかに思える発想です。しかし、この法律にはまともな予算が付けられず、骨抜きにされてしまいました。

さて、募るばかりの保護者のストレスをみて、「苦しみを取り除いてあげたい」と思った肥田先生は、若いお母さんたちに「被曝をしたと覚悟をなささい」、と伝えるそうです。「今の日本では内部被曝から逃げることはもうできない」という認識と合わせて、みなさん、どう思われますか。シビアなアドバイスに聞こえるでしょうか。

こうした現状に向き合うには、免疫力を保持するしかなく、そのためには生活習慣を徹底することが不可欠。「早寝早起き」や「ご飯をよく噛む」など、肥田先生が提唱することは素朴にみえますが、実施するとなると強靱な意志が必要になりそうです。そもそも私たちが暮らす世の中では「規則正しい」、「身体によい」生活習慣を本人の意志で保つことが極めて難しいではないですか。ましてや3.11がもたらした混乱、経済困難、払拭しがたい被ばくの不安を抱えながらでは……。しかし、肥田医師の現実と向き合おうとする揺るがない姿勢は安易な被曝安全神話や、さらに悪質な広島・長崎を引き合いに、健康問題を口にして福島差別を助長してはならない、というスタンスとは相容れないものです。

ついでに、ですが、「日本では内部被曝から逃げることはもうできない」ということで、こういう情報があります。アーニー・ガンダーセンという内部告発をして教育活動に専念するようになった元企業原子力エンジニアとマルコ・

カルトフェンというウスター・ポリテクニク大学の核科学・工学の教授が2011年と2016年に福島県を中心に、日本各地と北米で収集したサンプルのホットパーティクル調査で、いちばん高い放射活性を示したのは2011年、名古屋の掃除機の埃から見つかったものです。このパーティクルは破壊した炉心の一部と推定されます<sup>6)</sup>。サンプリングを数回繰り返した結果、他には見つからなかった、という報告に少しホッとします。

とはいえ、名古屋に暮らすみなさんにこのことをお伝えしようか、躊躇いかなかったわけではありません。それは「ひばく」という言葉が日本語で特別な響きを放つからかもしれません。聞いた途端、怯んでしまいませんか。原爆投下をもたらしたものはあまりにもおぞましかったですし、その歴史が薄れたかに思われても、差別という忌まわしい副産物は地下で脈々と生きながらえていたようです。それは原発事故でいとも簡単に頭を擡げ、分断を生み出してきました。ご自身被ばく者で、何十年も被曝医師として尽力してきた肥田先生はともかく、「被曝を自覚せよ」とはあまりにも厳しい求めかもしれません。同時に、国や東電ほか原子力推進派の被曝安全神話には決して加担したくありません。

### **被ばくの不安を軽減するカウンセリングとは**

被曝の認識はどうあるべきか、という課題には完璧な答えがパッと浮かんでくるとは思えません。私にとって考えるヒントになる言葉のいくつかを共有させてください。最近、いみじくも『放射線被ばくの不安を軽減するために 医療従事者のためのカウンセリングハンドブック』をタイトルに掲げた本を手に入れました。副題は『3.11. 南相馬における医療支援の記録』とあり、2014年刊です。Q&A形式で、現場の人にとっては使い勝手がよいのではないのでしょうか。2-16は「専門知識をふりかざすクライアントへの対応」を取りあげ、「学会論争」にならぬよう、正面から応えることを避け、「クライアントの注意をできるだけ早く自然のバックグラウンドの理解に向けるよう心がける」よう勧めています。まず、ここで気になるのは「自然のバックグラウンド」という表現です。確かに、例えば環境省の「時間当たりの被ばく線量の比較」の説明に

「富士山のような標高が高い所でも、標高の低い所に比べると宇宙線の影響を強く受けるので、空間線量率が高くなります」とあるように、「自然のバックグラウンド」と称せるものはありますが、現在私たちのバックグラウンドにはあの凄まじい核実験の時代がまき散らした放射性物質やチェルノブイリ前後の原発事故が加えたものが含まれ、「バックグラウンド」は固定化されたものでも「自然」でもないのです。こうした初歩的知識の誤りがほんとうに誤りなのかどうか、不信感を抱いてしまいます。内容としてもう一つ気になるのは、しきりにICRP（国際放射線防護委員会）を最大の権威、信頼できる権威として掲げていることです。これは3.11以後、国連人権委員会を除いて、国際機関はこぞって被曝被害を否定してきたことを無視したアプローチです。「カウンセラーは政治的に中立の立場を守る必要がある」と主張しながらも、政治色を感じざるを得ません。

また、カウンセラーが依拠すべき科学的、医学的知見とともに、文面からうかがえる「クライアント」に対する姿勢が気になります。知識を「ふりかざす」クライアントへの対処法。例えば、子どもが放射線に弱いと聞いて心配するお母さんに『私もお母さんの意見に賛成です』（クライアントが自ら判断したように『錯覚』を利用。カウンセラーの指示的行為より強い）」とあります。相談者の「不安を軽減」することは肥田先生が「苦しみを取り除いてあげたい」気持ちと重なるはずですが、しかし、肥田先生の対応は、シビアとさえ思える現実認識の求めに始まっており、このハンドブックのスタンスとはかなり違うように思えます。カウンセリングとは現実がもたらす苦しみを認めることに始まり、まずは相談者の孤立感を軽減してくれるのではないかと私は素人ながら考えていたのです。3.11が生み出したこのハンドブックへの違和感がどうしても払拭できず、一節をスキャンして友人でベテランの心理臨床家の横湯蘭子さんに送ってみました。彼女の応えはキッパリしたものでした。「『放射線被ばく』への不安の軽減を目的にするカウンセリングってありうるのでしょうか。不安であればあるほど放射能被ばくについて知りたいというのは自然の理であり、『情報オタク』にもなる人間がいて当たり前です。……『専門知識をふりかざす』『情報オタク』にならざるを得ない被害者の危機感、絶望感に対



してどのようなカウンセリングができるというのでしょうか！」広島・長崎の原爆投下は横湯さんの子ども期で、ビキニ原爆実験と「原爆マグロ」は青春の重大な出来事でした。しかも、第五福竜丸は焼津のマグロ漁船で、彼女のふるさとは隣町の藤枝です。核の脅威を身近に意識しながら成人したように思えます。

横湯さんの反応に私はホッとしました。一義的な当事者ではない私がホッとしているのか、とも思いますが。もう一つ、抛り所として思い浮かぶ言葉があります。それは福島の精神看護師の友人が教えてくれた精神科医ベッセル・ヴァン・デア・コークの優れた著書『身体はトラウマを記憶する』に紹介されているものです。そこでヴァン・デア・コークは自分の恩師の言葉を引いています。「最大の苦しみの原因は自分自身に語る嘘である」。武藤類子さんの「きちんと」した絶望、肥田医師の「被曝をした覚悟」、横湯さんの「被ばく不安」を「軽減」しようとするカウンセリングの否定。すべて、呼応し合っていませんか。

でも、外部から、ましてや(?) 内部で「被ばく」を口にする事の難しさはどうしたらいいのでしょうか。先ほど、鎌仲監督の「ヒバクシャ 世界の終わりに」(2003年)に触れましたが、2014年には「小さき声のカノン」で福島とベラルーシの人びとを取りあげています。その一場面で、NPO 法人いわき放射能市民測定室「たらちね」による甲状腺検査が二本松市の幼稚園で進行中です。検査で「1ミリ程度の嚢胞が多発している」と言われたお母さんの動揺を見て、「たらちね」の理事・鈴木香さんは「大丈夫ですおかあさん、わかります、私も子どももいるので……。ただ、ちょっとあの様子を見るっていうのは必要なので。だいたい二本松もそう、まあとにかくこれ被ばく地ですのでね、みんな同じです。」と話しかけるのです。

この映画を最初に見たのは3.11以後、核(原爆、原発)関係のビデオを一緒に見て語り合う仲間とでした。「被ばく」の事実を疑わないみなさんですが、鈴木さんが「これ被ばく地ですから」と言ったとき、私を含めて、思わずドキッとしました。聞き慣れた「被災地」ではなく、「被ばく地」、です。しかし、ここまでお話ししてきたことの流れて振り返ってみると、なんとも優しい

被ばくの現実の伝え方に思えてきます。どうすればこうした語り方を広げることができるでしょう。

### ベラルーシの高校生と日本の大学生

たまたまですが、昨日、東京で、ベラルーシの高校生二人と日本の大学生二人の話を聞くイベントに参加することができました。ベラルーシから来た二人の話し方がハキハキしているのにまず感心しました。「エーデルワイス」という高校のクラブ活動を説明してくれました。植物や水の放射能測定技術を身につけ、年少の子どもたちにも指導を施しているそうです。こうしたいわば実務的な活動だけでなく、先生や親たちがチェルノブイリの歴史と今日の実態が継承されることに力を入れていて、自分たちも、過ちが繰り返されないよう、受け継ぐことの大切さを実感している、と。日本の大学生二人ですが、一人は福島出身で、早い時期に姉妹と母親と東京に避難したこと、家族が分断したことまでレジュメに書き込んでいて、驚きもし、感心もしました。もう一人は福島出身ではないけれど、関心を持ち続けていたので大学のサークル活動でたびたび福島を訪れているそうです。

会場からの質問を提出する機会があったので、どうしても知りたかったことを書き出してみました。ベラルーシの二人は受けてきた訓練は健康を維持しながらその土地で暮らし続けるために必要な努力と理解していましたが、日本の大学生は全く健康に触れていないことが気になったのです。それはなぜなのか、と。東京に避難した学生さんは「もともと放射能の影響を恐れて避難したので、母はもちろん健康のことを考えていた」と。しかし、「それ以降、話す機会はあまりなく、特に福島の友だちとは原発のことはほとんど話せない。ほとんどというか一回しかない」と。もう一人、大学の活動で福島を訪れている学生さんは「実際行く時に活動の仲間は行きたいとか行きたくないということはチラッと言いますが、結局議論されずにみんな行っています。以後、それを取りあげる機会はありません。ですから健康のことを考える機会がないのです」、という内容の答えでした。ふたりの率直な返事には感謝しました。

原発事故——もう一度確認しておきましょう。これは核災害であることを

——が発生して6年にもなって、だれもが一番気になっていることがほぼ語られない現状はどうしたものでしょう。この不自由さは3.11にはじまったことではなく、福島に限った問題でもありません。戦後社会における広島と長崎、差別と沈黙、核の傘と原子力開発という一筋の流れが教育を筆頭に、他の社会的側面と重層的に絡み合い、息苦しい今日を絶え間なく作り出してきました。福島がその結果を顕著にしてくれたともいえるでしょう。いつになったら来るでしょうか。ほんとうは自分の身体、自分の命、大切な人の命を一番大事にしたいのだ、というころのささやきが解き放たれ、叫びになる日が。

### I TRUST YOU/ あなたを信じています

長くなりましたが、最後に、みなさんと一緒に短いビデオを見たいと思います。これは2016年11月19日に録画されたものです。つまり、トランプの勝利から11日目。場所はマンハッタンのセントラルパークで、背景にトランプホテルが見えます。そこに、一人の男性がプラカードを手にし、立ち止まり、自分に目隠しをします。そしてカメラはプラカードの文字を追いはじめます。「こんにちは。僕の名前はカリームで、アラブ系アメリカ人です。いま、多くのみなさん（ここで人種、エスニシティ、ジェンダー、宗教、セクシュアリティなどによってマイノリティと見なされる人びとを並べる）のように、とても怖いのです」と書き出されています。恐怖ではなく、いたわりに基づいたコミュニティを一緒に作っていかうのではないか、という呼びかけが続きます。あなたがどこから来て、どんな人であれ、あなたのことを気に掛け、守ることを約束します。僕があなたをよろこんで受け入れるように、僕のことを受け入れてくれませんか。よかったら、握手か、ハグか、一緒に写真を写してください。そしてインターネットに掲載してみてください。ここで、あなたと一緒に安全だ、という記しとして。最後に、I TRUST YOU（あなたを信じています）と大きな文字のとなりに真っ赤なハートが描かれています。

もちろん、これだけでは一人芝居になりかねません。目隠しをして、プラカードを持ち、じっと立つ男性とともに、通り過ぎていくニューヨーカーもいれば、立ち止まる者もいます。プラカードの文字を深刻な表情で読む年配の夫

婦。さっさと握手して立ち去る女性。決めた！とばかりにハグしに行く若い女性。照れくさそうにハグする若い男性。赤ん坊の頭をカリームさんのあごひげに近づけてこすってもらい、にっこりして去って行く若い母親。ビデオは3分強ですが、その日、カリームさんは5時間立ち続けたそうです。フルネームはカリーム・スレイマンといって、3歳のとき、レバノンの内乱を後に親御さんに連れられアメリカに渡ってきたプロのテノール歌手です。ビデオの音楽はアイルランドのミュージシャン、シネイド・オコナー作詞作曲の傑作、In My Heartです。後で、ご自分で、カリームさんの美しい歌声を聞きながら、ニューヨークのさまざまな表情を確認してください<sup>7)</sup>。

\*\*\*

#### あれから4年

バイデン政権一年目も終わり間近になった。こうして講演当時のことを振り返ると、「もう4年」よりも「たった4年」と思われ、つついため息が出てしまう。この4年間にあまりにも劇的だったからだろうか。後年、あれはたしかに歴史の転換期だった、と認められるのではないだろうか。トランプ政権が発足してしばらくは、こうは認識していなかった。勝利がいかに衝撃的であったにせよ、立ち向かう勢力が頼もしかったからだろう。講演で話したように、電話かけやはがき書きやデモへの参加から希望を感じるようになっていた。孫を連れて行くことに躊躇わなかったし、それは格別な喜びでもあった。当時もいつまでこういうことができるのだろう、という不安が脳裏をかすめることもあったが。皮肉ではあるが、トランプのやることなすことがあまりにも無謀なため、それが密かな期待に結びついていたことも否めない。外交、教育、環境政策。すべてがゼロから再出発するのでは、という雰囲気蔓延していた。以前から批判されてきた、不完全ながらの規制や社会保障も、年月をかけて構築されたもので、それが一夜にして崩れ去るかに見えたのだ。ふつうの神経なら、誰もがその非常識に呆れるだろうし、困る人も多いはず。衝撃的なイメージも氾濫していた。移民の家族が引き裂かれ、幼い子どもまで檻どうぜんの施設に送り込まれている、という報道。法務省の法律家が歯ブラシや石けんは必

需品ではなく、アメニティだと証言する場面。彼女の議論に呆れる様子を隠さない三人の裁判官。いくらなんでもアメリカ国民の大半は容認しないだろう、とってしまったのだ。

しかし、ことは悪化するばかりだった。常識を逸脱する政策だけでなく、以前は白昼では発せられない差別語、蔑視表現がまかり通るようになり、白人至上主義を提唱する自警団が集会に乗り込み、数々の暴力沙汰が話題になった。そして、2020年にジョージ・フロイド氏が殺害される。地べたに押さえつけられ、首には警察官の膝が押しつけられた一人の人間の息の根が止められる瞬間を目撃した人びとが立ち上がった。反差別、**Black Lives Matter** 支持運動が各地で沸き起こり、数多くの白人も参加した。とくに南の州では、南北戦争当時の英雄の銅像が撤去され、一瞬——もう一度——合衆国の原罪の一つである奴隷制度が残した、社会の隅々に浸透する構造的差別に向き合うかのように思えた。パンデミック最中のことだ。しかし、この動きに対する凄まじい巻き返しもすかさず起きた。銃の反乱はエスカレートする一方。果たして、こういう状況下で、カリーム・スレイマン氏はあのビデオ当時のように目隠ししてセントラルパークに立つことができるだろうか。

合衆国のもう一つの原罪は先住民の土地の略奪と絶え間ない弾圧。スタンディングロックの運動は、いかにネオリベ資本主義が略奪と弾圧を引き継いでいるか、如実に示してくれた。あの闘いの対象だったパイプラインはあれから運用が続き、最初の半年間で5回も漏洩が報告されている。(北ダコタ州全体では企業側の報告によると、2021年8月末までに漏洩500件も記録している。)他のパイプラインの建設も進められるなか、やはり先住民の人たちが抵抗の中心になっている。ミネソタ州では抗議活動の参加者の監視と保護のため、カナダの一企業が州当局に200万ドル以上資金調達したことが発覚する、という始末だ。

直接非暴力の抵抗運動も法廷での闘いも継続している。2016年12月に「未来を取り戻し」、翌1月にまた奪われてしまったトカータ・アイアンアイズさんは苦勞しつつも運動を続けている。2019年にはスウェーデンのグレタ・トゥンベリーさんを招き、一緒にパイプライン建設に反対し、気候変動の危機を訴

えるアクションを起こした。2020年11月のインタビューで、自分が体験した公教育は気候変動危機について一切触れず、化石燃料を是とする、有害なものだった、と振り返る。現在、バードカレッジ・サイモンズロックという高校の途中から入学できるユニークな大学で学んでいる。同じインタビューで、一番誇りに思う成果は、と問われると「正直なところ、成果は何一つ」ない、と。200年前にも阻止できた問題——非白人の無謀な殺害や土地の略奪や地球の痛めつけ——はむしろ悪化している気がする。世界で講演活動を行う彼女はどのようにやって人前で話せるようになったのか、秘訣を聞かれると、「しゃべり出す前は必ず怖くなります。でも、怖くてもなにかやろうとすることにはパワーがある。個人的な理解ですが、どの瞬間も一度しか巡ってこない、と思うので、自分で判断し、与えられた時間を大切に使いたい<sup>8)</sup>としっかり答えている。

とくに気候変動となると、若い人たちの発言と行動力に驚く。温暖化がもたらす危機は、若い人にとって、文字通り、未来の略奪になりかねない。現在、温暖化ほど意識されていないが、核技術（兵器も原子力発電も）も生き物にとって脅威であることには変わりはない。原発を温暖化対策として支持する誠実な人もまだいるようだが、提唱者はとんでもなくシニカルなのか、不勉強なのか、ひたすら欲深いのか、としか思えない。日本では、福島核災害に子どもとして遭遇した若者がぼちぼち発言し始めているが、日本の状況を考えると、多大な勇気を要することであるだけに、敬意と感謝を表したい。甲状腺検査を縮小しようとする動きに講演で触れたが、10年目のアンケート調査では、がんを罹患した当事者の圧倒的多数は検査の継続、もしくは拡大を求めていることがわかっている<sup>9)</sup>。思うに、2021年7月14日の「黒い雨裁判」の広島高裁判決は、この若い人たちの支えになり得るはずだ。この輝かしい判決は黒い雨に当たったかどうかは問わず、その雨域に暮らす人たちの健康被害の可能性が否定できない限り、訴えを認める画期的なもので、福島の内部被曝問題を視野に入れて書かれたとさえ思えるものだ。こじれた差別の歴史がこの「黒い雨」判決と運動を即福島で生かすことを困難にしているが、その日はきっとくるだろう。

アメリカでは社会・政治制度の不正に抗する若い人たちは珍しくない。上記

ジョージ・フロイド殺害事件以前も以後も、白人至上主義に対して、多くの学生が立ち上がっている。共和党はみずから得するよう選挙区の書き換えなどを着々と進めているなか、バイデン大統領が優先項目に掲げていたジョン・ルイス投票権促進法が置き去りにならないか極めて不安だ。(ジョン・ルイスは長年ジョージア州選出の下院議員で、25歳のとき選挙権確保のための非暴力行動で半殺しにされた経験がある。) ホワイトハウス前で市民的不服従を意味するアクションが継続的に実施されてきたが、今年(2021年11月)にはマーチン・ルーサー・キング牧師のたった一人の孫娘ヨランダ・キングさんも拘束され、13歳という年齢故に釈放された。「58年前と同じことのために闘わなくてはならない」ことを嘆いている。ちなみに、このヨランダ・キングは2018年、9歳のとき、銃の乱射事件に遭遇した高校生が企画し、全国へ、世界へと広がった「私たちの命のための行進」のワシントン会場で祖父の「私には夢がある」を引用して、80万とも報じられる参加者に語りかけた。こうした若者や子どものアクションには眩いものがある。しかし、大人として、感心ばかりしているのも歯がゆく、後ろめたくもある。そして、彼女たちが世代を超える、同じ闘いを繰り返している、という指摘が重くのしかかってくる。

もう一度、転換期を生きている、という感覚に戻りたい。あらためてトランプ政権発足直後の講演当時の心情を振り返ると、自分の現状認識の甘さに驚いてしまう。その甘さはその後も続いたと思わざるを得ない。危機は感じ、2020年の大統領選挙前には必死で苦手な見知らぬ人への電話かけもやった。そして、バイデンの勝利が議会で承認される予定の2021年1月6日に起きた合衆国議会議事堂事件には目を見張った。しかし、その深刻さを実感したか、となると、疑わしい。最近になって、詳細がかなりわかってきて、これは本格的なクーデターの試みだったことがはっきりしてきた。ここで言いたいのは、現状認識の不測は情報がまだ出そろっていなかったから、という次元のものではなく、状況の深刻さを受け止めるのに心理的な壁があった、ということだ。端的にいうと、いくらなんでもアメリカはファシズムに陥らない、という政治的安全神話らしきものに捕らわれていた。「ファシズム」という言葉を安易に用いたくない、という警戒心はながらく持っていたが、その可能性が近づくにつ



れ、あまりにも恐ろしく、否定したくなっていたのだろう。いまとなつては明白だが、トランプと支持者らは選挙の結果を認めるつもりは全くなかったのだ。共和党員の圧倒的多数が2020年の選挙を盗まれたもの、と信じていることは多数の世論調査で確認されている。結局、2020年の選挙結果はペンシルベニア州の最高裁の一機関以外、一握りの人たちの決断によって守られたことになる。南部ジョージア州知事や州務長官。ミシガン州の一郡の選挙役員。副大統領のマイク・ペンス。いずれも共和党員。トランプ自ら率先し、想像を絶する圧力がけられたにも関わらず、法で定められたとおりに職務を遂行したのだ。頑強に思える制度も状況次第でこれほど脆くなり得る。

今回はこうした瀬戸際に追い込まれないよう、トランプ勢力にほぼ100%支配される共和党は選挙区を書き換えだけでなく、投票時間の縮小や投票条件の引き締め対策に躍起となり、できる限りマイノリティの選挙参加を押さえ込み、民主党に不利に働く策を講じている。謀反者は容赦なく排斥され、「殺すぞ」との脅迫がやまない。もはや共和党は議會制民主主義の体裁すら保つ意志がないことが明確だ。最高裁もトランプ任命判事が3人で、6対3で共和党が標榜する価値観に有利に作用する。これは合法的な政府の乗っ取りとでもいえるようか。そこに、パンデミックは一役も二役も買っている。コロナ禍を真剣に捉えなかったトランプの無作為がどれだけの人を無用な死に追いやったかは無視され、マスク着用もワクチン接種も党派的争点になってしまった。要請することは個人の自由の侵害を意味する、と実に猛烈な反対が起こる。学校現場ではとくに切迫していて、保護者が教員の顔からマスクをひたたく事件も報じられるなか、その立場によっては校長や教育委員会が脅迫を受け、教室に警備員が送り込まれる騒ぎだ。マスクを目にした途端、大きな政府、個人の自由の侵害=忌まわしい民主党、と反射的に罵倒とともに手も出るようだ。私は民主党の大企業や銀行優先の中道思考から抜ききれない側面、バイデン政権の移民、外交、核政策など、いらだちも不安も抱くことが多々ある。しかし、なりふり構わなくなった政治家と支持者が半数を占める社会でどうやって民主主義が守れるのだろう。こう書いた途端、「民主主義を守る」とはどういうことだろう、と考え込んでしまう。ジョン・ルイス投票権促進法の立役者であった

ジョン・ルイスは2020年に亡くなる二日前に執筆したエッセイで、「民主主義は常態ではなく、行為である」と書いている。

民主主義の退廃は忍び寄っていたのだろうか。それが突如駆け足に変わったかのように見えるのだろうか。それはともかく、トランプ政権の4年間で、いかに人が人を蔑むことが社会に浸透したことか。貧富の差はパンデミックの影響もあってさらに激化し、負けくじを引いた者も——とくに白人であれば——トランプ勢力の価値観に組しがちだ。それにも関わらず、まさかファシズムが支配的になる、と思うことを拒否してきたわけだ。ファシズムは一気に、均等に社会を占拠するもの、と決めつけていたからかもしれない。しかし、その過ちを是正する視点に3年ほど前、出会っていたのだ。1970年にブラック・パンサー党の応援のためにアメリカを訪れたフランスの作家ジャン・ジュネはアメリカの黒人は常にファシスト体制の下で暮らしてきた、と述べていた。

こうしてかつての現実認識を批判的に振り返ってみて、当時の行動や期待を否定するつもりはない。大統領選挙のささやかな活動ともつながった。しかし、どうしても、目を背けたくなる心理をもう少し点検してみたい。「屈することなき絶望」が収録されたコレクションにイタリアの映画監督で物書きのピエル・パオロ・パゾリーニ (1922-1975) の *La Rabbia* (憤激) という作品を取り上げたエッセイに刺激的な一節がある。*La Rabbia* は1945年から1962年までのニュースリール映画を一時間のドキュメンタリー映画に仕立てたものだが、出来映えを見たプロデューサーが気弱になり、右翼のジャーナリストに後編の作成を依頼し、合作を上映するつもりだったが、結局、いずれも公開されることはなかった<sup>10)</sup>。バージャーは *La Rabbia* におけるパゾリーニの視線をこう描いている。「『憤激』は怒りではなく、壮絶な忍耐から生まれた作品だと言いたい。世界でなにかが起きているか。パゾリーニは怯むことなく、冴えた視線を向ける。(同じような眼差しがレンブラントの天使にも見受けられる。)なぜそうなのか。われわれが愛することができるのは現実以外にないからだ。他にないもないのだ。」

「他にないもない」から現実を「愛する」とはどういうことだろう。なんど読み返しても、ここで立ち止まってしまう。そもそも、現実を愛する必要なん

であるのだろうか。少し先を読んでみよう。「欲深い者、権力を牛耳る者の偽善や真実の顔をした偽りや見せかけは徹して退ける。無知を生み出し、醸成するからだ。無知とは現実に対する盲目の一形態でもある。」しかし、「彼が愛した現実はそのまま肯定するわけにはいかなかった。当時、それはあまりにも深い歴史的失望を表すものだったからだ。1945年、ファシズムの敗北とともに開花した太古から伝わる希望は裏切られたのだ。」だからといって、「託されたものは見捨てるにはあまりにも尊く、頑強であった。あるいは、こうも言えるだろう。いたるところで現実から発せられる、言葉にならない要求は無視できるものではなかった。ショールの纏い方から伝わる要求。ある若者の顔つき。少し不正を減らせ、と街にあふれ出る人びと。期待を運ぶ笑い声や無謀な冗談。これらがパゾリーニの憤激の忍耐の源だ。」現実を愛するとはその全てを肯定する要請ではないのだ。敵を愛せ、でもなさそうだ。(否定しているわけではないが)「愛」という強力で身体的でもある感情で現実全体を引き受けること。抱きしめようとする、いや、体内に取り込もうとする覚悟なくしては酷い世の中に押しつぶされ、いかなる抵抗も不毛に思え、無関心に陥りかねない。絶望すら諦めたら「ショールの纏い方」、ささやかな期待の「笑い声」や「無謀な冗談」を見落とし、聞き逃し、欲深い権力の偽りや見せかけしか残らないではないか。「壮絶な忍耐」こそ鍛えたいではないか。

\*\*\*

最後になってしまったが、講演当日は、贅沢な疑義の時間が設けられたことを記しておきたい。「贅沢」とは長さだけでなく、真摯な質問やコメントが会場から多く寄せられたという意味だ。スタンディングロックの闘いはなぜ可能だったのか。どうして日本では社会や政治に関心を表明することがこうまで難しいのか。アメリカのデモは思い思いのプラカードを掲げているではないか。日本では個を持つことは仕事や生活に関わって、負担になってしまう。職場は厳しい。障害をもっていれば、発した意見に職員がなかなかまともに向き合ってくれない。だれもが「特別」でありたいが「特異」にはなりたくない。日本はずっとこうだったわけではない。どうして、いつから、こうなってしまった

のだろう。福島について具体的な疑問も投げかけられた。食品の安全を確保するために、日本でもベラルーシでも放射性物質の測定が行われているが、大事な対策と思える一方、人が汚染した地に居続けることを肯定してしまうのではないか。これは他の感想や質問とちがった次元にあるかに思えたが、いまはそうでもない気がする。要はもっとも身に迫る問題がオープンに語られ、難しい条件下でも、最良の方向をとともに模索していくことだろう。しかし、こうした関わり方が可能になるには、それ以前に、日常的に、ささやかでも自由な対話を歓迎する雰囲気が必要だ。それこそ「現実を愛する」ことではないだろうか。忍耐と勇気と隙間ほどのこころの余裕を見いだす。幼少期から育みたいが、いくつになっても遅くない。「愛」とは無くてはならない贅沢だから。生きることは大切すぎるから。

\*\*\*

雨降りのなか、多くの方が参加してくださった講演会。4年経って振り返ってみると、一堂に会せたこと自体に感謝の念がこみ上げてきます。当日、講演の協力団体の「子どもたちに安全な未来を手渡す会」の代表・杉崎伊津子さんと「名古屋歴史科学研究会」の代表・大塚英二さんにお二人の問題意識に基づいたご挨拶をいただきました。「子どもの未来」を案じること、「民主的」な歴史学を追究することの深いつながりはお二人の言葉から容易に感じ取れましたし、今後、どこであれ、こうした未来と過去を現在につなぐ努力が必要であることを痛感しました。講演会は愛知県立大学日本文化学部教員の川畑博昭さんがご自身の研究との関わりで主催してくださった (JSPS KAKENHI Grant Number JP26380042)。川畑さんとはじめて会ったのはたった5年前ですが、生涯の学びの友、と考えています。今回の講演だけでなく、大塚先生ご退職にちなんで光栄にも『国際文化研究科論集』の特集号に参加させていただくことになりました。私の限られた体験ですが、近年の歴史では特異に思えるこの4年間を振り返ることは苦痛を伴いますが、それでも必要なプロセスであり、貴重な経験となりました。文字起こしを引き受けてくださった愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文学専攻博士課程前期課程1年(当時)の川口美夢さんに

もお礼を申し上げます。至難の業にちがいがなかったこの作業なしには、この振り返りは不可能でした。

## 注

- 1) バージャーの作品は、『見るということ』など、日本語訳されているものもありますが、まだまだ、とくに晩年の静かな輝きを放つエッセイが残されています。「屈することなき絶望」(“Undeafed Despair”)は *Hold Everything Dear: Dispatches of Survival and Resistance* (すべて愛おしく 生き残り抵抗の発信) 収録で、中野真紀子による訳が雑誌「みすず」2017年8月第59巻第7号に発表されました。
- 2) The Asia-Pacific Journal: Japan Focus のサイトに掲載され、日本語の原文もダウンロード可能です。 <https://apjjf.org/2016/17/Hirano.html> (2016年9月1日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 3) どのような翻訳作業もそうですが、“Black Lives Matter”はとくに言葉を置き換えれば済むということにはならないでしょう。矢口祐人「“Black Lives Matter” どう日本語に訳すかという本質的な問い」(2020年6月18日、最終閲覧日: 2021年11月24日)。
- 4) <https://kuow.org/stories/what-other-banks-are-loaning-money-dakota-access-pipeline/> (2017年3月1日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 5) <https://www.youtube.com/watch?v=OjotlPIIRqw> (2016年12月7日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 6) 説明ビデオと日本語文字起こしはこちらで見ることができます。 <https://www.fairewinds.org/nuclear-energy-education/hottest-particle> (2014年4月3日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 7) I Trust You プロジェクトのビデオは YouTube で視聴できます。 <https://www.youtube.com/watch?v=ICy8Cfvoe6g> (2016年11月19日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 8) <https://assembly.malala.org/stories/tokata-iron-eyes-on-why-the-climate-movement-needs-to-listen-to-indigenous-voices> (2020年11月18日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。
- 9) 『原発事故から10年 いま、当事者の声を聞く 甲状腺がん当事者アンケート 105人の声』 <https://www.311kikin.org/> (2021年10月15日、最終閲覧日: 2021年11月22日)。2022年1月27日、原発事故当時福島在住、6～16歳で甲状腺がんを発症した男女6名が東京電力に損害賠償を求める裁判を東京地裁で起こしました。「被曝で小児甲状腺がん」東電を提訴へ～原告が涙の訴え」 <https://www.ourplanet-tv.org/44328/> (2022年1月26日、最終閲覧日: 2022年2月14日)。
- 10) 前編後編の合作は現在、英語字幕付きで、YouTube で視聴することができます。 <https://www.youtube.com/watch?v=aYnmrN77oiI> (最終閲覧日: 2021年11月22日)。